News Letter　２００７．１１．１　第９号

たちばな

京都大学女性研究者支援センター
Center for Women Researchers

10月1日より、センター組織が新しくなりました

女性研究者支援センターは、10月1日よりセンター長の交代を行い、塩田浩平医学研究科教授に代わって、稲葉カヨ生命科学研究科教授が新センター長に就任しました。それに伴って伊藤公雄文学研究科教授が「京都大学モデル」推進室長になり、同時に病児保育ワーキンググループを新設し、グループ主査に足立壮一医学研究科講師が就任しました。新しい体制のもとで活動してまいります。引き続き 、皆様のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

＜センター長挨拶＞

稲葉カヨ　（生命科学研究科教授）

京都大学では、「女性研究者の包括的支援『京都大学モデル』」計画を進めるため、昨年の9月に「女性研究者支援センター」を設立ました。この間、前センター長の塩田医学研究科教授のもとに、５つのワーキンググループからなる推進室を設けて、それぞれの事業を推進してきました。時期半ばにして、塩田教授が医学研究科長の重責を担われることになったため、急遽推進室長を務めて参りました私が、センター長として本センターを担当させていただくことになりました。

これまでも、推進室委員の諸先生やセンター教職員の方々の努力により、様々な事業活動を行ってきておりますが、京都大学の男女共同参画の中核を担う組織として大学の中でもその存在が日々大きくなってきていると思います。女性研究者が生き生きと輝いて活躍できるよう、女性研究者が着実に増加していくよう、本センターは努めて参ります。多くの方々に、センターを訪れ、利用していただきたく存じます。センター事業が継続して、さらに手厚いものになるよう、京大構成員の皆様のご協力を心よりお願い申しあげます。

＜「京都大学モデル」推進室長挨拶＞

伊藤公雄　（文学研究科教授）

このたび、稲葉前室長のセンター長への就任にともない、１０月から女性研究者支援「京都大学モデル」推進室長をおひきうけすることになりました。「なぜ、男性教員が、女性研究者支援の担当者に」という声もあるかもしれません。個人史的なことをいえば、いわゆるジェンダー課題については、すでに３５年近くかかわってきました（「なぜ、そんなことになったか」の経過については、京大学術出版会から最近出版された『「偏見・差別・人権」を問う』での私の担当の章をお読みください）。当初は、主に、当事者である「男性性」に焦点を絞った研究をテーマのひとつにしてきたのですが、ここ２０年ほどは、ジェンダー政策そのものに深く関与してきています。これまで、旧文部省の青年男女の共同参画事業の委員や、内閣府男女共同参画会議の専門調査会委員、さらに官房長官の試問委員会「男女共同参画社会の将来像検討会」座長代理、学術会議のジェンダー部会副委員長などの立場から、女性のチャレンジや、女性研究者問題にもかかわってきました。政策立案と現場の双方をつなげる形で、大学におけるジェンダー政策にかかわっていくつもりです。今後ともよろしくお願いします。

ジュニアキャンパスにて特別協賛ゼミを開講

女性研究者支援センターは、今年度ジュニアキャンパスに特別協賛ゼミとして参加を認められ、9月30日に「女性研究者になるためには（登谷）」と「江戸時代の人生を再現する－古文書のデーターベースから統計分析へ（落合）」を提供しました。参加者は、中学生が4名、保護者６名でした。女性研究者支援センターを見せるという目的もあって、センターの2階の会議室で講義を行ったのですが、少し会場が狭かったかなと思います。

登谷は、研究者になるには今から１０年はかかるが、京都大学では、家庭を持って子どもを育てて研究をする環境をいろいろ整えているから、研究者になることも視野に入れて将来計画を立てて欲しいといった話をしましたが、中学生にはちょっと早すぎたかなという感じはしました。

ところが、落合先生が江戸時代の宗門人別改帳から得られた情報を表にした資料を実際に中学生に手渡して、「この表から読み取れることを言ってみてください」と言って作業を始めると、最初は分かりにくそうにしていた中学生も、だんだんコツが分かってきて、「あ、ここで赤ちゃんが生まれてる！」「ここで下男が辞めてるんや」とかにぎやかに話すようになってきました。研究のための作業がどのようものかということが少し分かって楽しそうでした。保護者のおかあさん達も楽しんでいただけたようで、感想文には興味深い内容でしたと書かれていました。（登谷記）

シンポジウム「性差科学の最前線」

９月２１日（金）午後４時半から７時、法経本館１階第５教室にてシンポジウム「性差科学の最前線」を開催しました。「性差」を科学的に論じることをテーマとしたシンポジウムで、２人の講演者による講演の後、全体討論を行いました。

＜開会の挨拶＞

松本紘
（京都大学研究・財務担当理事）

本日は、若い女性の研究者の方も、それから男性の方もたくさん来ていただきうれしく思っています。女性研究者支援センターの活動は、女性だけで頑張ってもいけないですし、男性だけ来ていただいても困るのです。ちょうどいいあんばいだなと思って拝見しております。

実は私の家内が、足の骨を折りまして、いま入院しています。私の母親も同居して４世代一緒に住んでいるのですが、その母親も最近骨折しまして、家に中のことをしてくれる者が誰もいないのです。

お年寄りの介護の問題をよく理解しようと思ったら、その不自由さを体験しないと本当の不自由さがわからないということで、若い人がばねを付けたり、重しを着けたり、車いすに乗ったりして体験する場がありますね。ちょうどそれと同じ状態を今私がやっています。

女性研究者がたぶん経験されたこと、あるいはされようとしていることを、私が今この歳になってやっと経験していると思います。まず家では飯をつくらないといけない。それから掃除、洗濯をしないといけない。家の戸締まりもしないといけないという状況に追い込まれまして、３カ月近くなります。

そんなことを体験し、ますますもって、これは女性研究者を支援しないといけないと私個人も思っており、また職責上もやらないといけないと思っております。

本日、お二人の先生にお話を伺う機会を与えられたことをたいへんうれしく思っております。 長谷川先生、大隅先生よろしくお願いします。

塩田浩平
（女性研究者支援センター長・
医学研究科教授）

本日は多数の皆様にお集まりいただき、ありがとうございます。

女性研究者支援センターは、昨年の９月５日に発足し、ちょうど満１歳を迎えましたが、国の予算と大学のご支援をいただき、順調にここまでやってまいりました。

昔から京都大学には女性の研究者がたくさんおられましたが、女性教員の数は非常に少ない状況が続いてきました。当センターでは、女性研究者に頑張っていただけるよう、様々な形でサポートしようとスタッフ一同努力しております。

この１年間に、高校生等の若い方から一般の方々までを対象に、さまざまな講演会やシンポジウムをやってまいりました。しかし、その多くは、女性研究者を取り巻く問題点を主として社会科学的な立場から議論したり、あるいは女性研究者のための政策立案にかかわられた先生においでいただいてお話をうかがうという会でした。それぞれ非常に興味深く、教えられるところが多かったのですが、本日おいでいただきました長谷川先生と大隅先生は、これまでの方とは少し違い、どちらも生物学の領域で研究してこられた、すなわち理系の先生です。

お二人とも、現在の日本の女性研究者を代表する方です。今日は新しい観点から性差の科学を論じていただき、素晴しいお話がうかがえると期待しております。

＜講演＞

性差の起源を探る：生物学的性差と社会

長谷川眞理子（総合研究大学院大学教授）

私は主に大型のいろいろな動物の行動と生態を研究してきましたが、ずっと一貫して興味があったのは、雄の戦略と雌の戦略がなぜ違うのか、どのように違うかということ。相手がチンパンジーであれ、ニホンザルであれ、クジャクであれ、シカであれ、それが一貫した理論的テーマでした。

人類学出身なのに、全然人間というものには興味がなく、研究する気はありませんでしたが、ある時、あることがきっかけで、生物的な理論をどういうふうに人間に当てはめたらいいのかということの方針がわかってきました。たぶんこれからの私の一生の仕事だと思うのですが、人間を考える人文社会系の学問を、生物学的に見たらどういうふうになるのかという観点から研究できたらと思っております。

さて、動物というのは、雄と雌にさまざまな性差があるというのは驚くばかりです。身体の大きさ、かたち、生態、成長のパターン、生存率、死亡率も違うし、行動の面でもさまざまな違いがあります。

では性差はなぜあるのでしょうか。究極的理由は雄と雌では繁殖成功のための戦略が異なるからです。卵は大きくて栄養があって数が少ないです。精子は小さくて栄養がなくて、数は莫大です。次の１個体をつくるのに、１個ずつしか必要がないので、大きさと数の違いというのは、非常なアンバランスを生みます。数が少ない卵が、結局次世代の数を決めるわけです。そうすると生きていくあいだにどうやって時間配分をするか、エネルギー配分をするかという生活史戦略に違いが出てきます。それは配偶者獲得競争とか、配偶者選択の違いにあらわれてきます。もう一つ、雄と雌は、繁殖するためには一緒にならないといけない。そこで雌雄の対立が起こり、雄にとって適応的な戦略と、雌にとって適応的な戦略が葛藤を起こします。

動物の場合は、これで説明がつくのですが、人間の場

生物学的性差（nature）と社会的性別（nurture）をつなぐ

合は複雑です。人間は、決して一人が自己完結して自分の食べるものを採って暮らしていません。そこで、資源獲得、資源配分、資源の継承とかが、生きていく上で網の目のようにかかってきて、個体の繁殖行動の適用戦略を見えにくくさせるんです。雄と雌、男性と女性というのが、やっぱり生物学的に雌である女性は子どもを産んで、ミルクを飲ませるという制約がかかっている。それは生物学的にいまでも変わりないのですが、でもそこから先は、どうやって自分の餌を食べていくか、どうやって子どもに餌を食べさせていくかということが、すべて社会のネットワークの中に組み込まれてしまうので、性淘汰の枠組みのように配偶者獲得競争とか、配偶者選択がストレートに出なくなります。

ヒトの社会のシステムとジェンダー概念というのは、解きほぐすにはたいへんで、ヒトで何が起こっているのかということを細かく見ないといけません。システムの構成要素として、男性と女性はやっぱり性質が異なるところがいっぱいありますし、その個体差もありますから、どういうシステムをつくるのが一番いいのかということは、一概に言えません。すべての男性、すべての女性にとっていいということもないでしょうから、きめ細かく考えるべきであり、そこはまだ、なすべきことがいっぱいあると思います。

認知機能の性差

大隅典子（東北大学医学系研究科教授）

私は、脳科学研究をしており、メディカル系にいますので、まず性決定のメカニズムからお話をさせていただきます。ヒトの染色体は46本あり、お父さん由来とお母さん由来の１セット２３本ずつの２セットが、私たちのすべての細胞の中に入っています。染色体レベルでは、精子と卵子が合体して受精するときに、性決定遺伝子（ＳＲＹ）がはたらくかどうかによってその生殖腺が雄型か雌型か、男性型か女性型かというのが決まります。そしてそこから性ホルモンが分泌されるのです。

脳については、脳の構造といったレベルで男性、女性のあいだに違いがあります。女性は男性よりも約100グラムぐらい脳の重さが軽い。灰白質の割合が高い。また、脳の発達では、男女にかかわらず、人間の脳は20歳を過ぎるまでの長い時間をかけて発達していくことも研究調査からわかっています。遺伝的に決まっている部分とその後の環境的な部分があるということです。

また、精神的な心の病というものの中で、男女比の違いがあることは精神科の医師たちの間でよく知られていることで、摂食障害は圧倒的に女性のほうが多く、うつ病、パニック障害も２倍くらい女性のほうが多い。統合

失調症は男女の発生率は変わらないですが、男性は20歳前半、女性は出産後や閉経後に発症のピークがきます。うつ病の患者さんは自殺する方が多いのですが、男性の自殺率の方が高い。ただ、自殺は社会的な原因もあって引き起こされることで、日本では、50～55歳くらいの男性に多いことは、リストラの問題とかがあると考えられます。

さて、男女差については、生まれか育ちか(Nature or Nurture)ということが議論になります。たとえば才能というのが「gift」すなわち天からの贈り物であるというふうに、子どもに対して言い続けると、何か失敗したときに、これはもう自分ではどうしようもないと思ってしまうことが起きる。何か大きな挫折をしたときに、そこを努力で乗り越えるのではなくて、自分には才能がないのだという思い込み方をしてしまう。人間の場合、非常に長い時間をかけて発達していくものですから、そのあいだにどんな経験をしているかということが非常に重要で、「努力」ということを子どもたちに教えていくことが重要だと考えられます。必ずしもこれは男女の差ということではありません。

ただし現実において、女性が男性よりも、例えば研究費であるとか、フェローシップをもらいにくいということは、論文であるとか、あるいはしばらく前に男女共同参画学協会連絡会という、理系分野のいろいろな学会の男女共同参画に関する連合体がおこなった大規模調査などでも出ています。

今日の私からのメッセージですが、男性と女性における平均値の差は、それぞれの人の個性、個々個人の性質とは、分けて考えなければいけないと思います。ジェンダー・バイアスというものは、教育などにおいて、可能であればできるだけ排除すべきであると思いますし、そのなかで大事なのは、それぞれの人の個性をいかに伸ばしていくかという観点でやることができればいいのではないかと思います。

それから、科学的な疑問として、例えば男と女はどんなふうに違うのかという話と、いろいろな職業における機会均等、地位の平等、職場のバランスといったことは、分けて考えるべきだと思います。もちろん科学的に見た男女の差は、まったく無視できないとは思いますが、人材の多様性確保ということは必要だと思います。

連載：研究者になる！－第５回－

農学研究科教授　新山陽子

研究者になる！がテーマであるが、ふりかえってみると研究者としての自分がもてるようになったのはかなり遅かったように思う。今もまだ進歩（だとよいが）の途上である。

私は1970年に京大農学部に入学し、応用生物学をやりたいと思っていたが、途中で社会科学に興味をもち農業経済学に転学科した。きっかけは友人に誘われて経済学部のサブゼミに加わったことであり、学部の壁が低い京大ならではのことだったかも知れない。チューター役の院生の人の手ほどきを受けながら経済学の原典を読んだことが、研究への関心につながったように思う。

大学院時代のゼミは厳しく、ただただ、もがき苦しんだ。農業経営学の分野に進んだが、一般経営学や農業経営学の学説を徹底して見直すことがゼミの課題だった。最初は経営経済学というものの目線にどうしても得心がいかず、これだけやってもまだわからないのか！と指導教官に怒鳴られたこともある。それでやっと川を飛び越せたくらいで、この頃はまるで霧に包まれたように研究の方向性が見通せなかった。でも、このなかで今の思考の基礎ができたように感じている。進路についても、オーバードクターが大勢いた時代で、私は研究室最長の５年間をODで過ごし、研究室の助手に採用されてようやく終止符を打った。

この時期を乗り越えることができたのは、何よりも研究室の仲間の存在があったからだと思う。今でも彼らは大切な存在であり、何かにつけてやりとりしている。さらに、これが最大の要素だったかも知れないが、フィールドが、おもしろかったからだったと思う。博士課程になって和牛の新興産地の構造分析を始めた。鹿児島、岐阜、青森などへ頻繁に通い、多くの人たちに現場のことを教えていただいた。精通するのに10年近くかかったが、小さな単行本にまとめることができた。また、指導教官のけっして甘やかさない容赦のない厳しい指導があったことも、あきらめずにやれた一因かも知れない。長いODのすえに２年続けて病気をしたとき、体を張ってやっていないと叱られたことを今でも思い出す。

しかし、職についても研究上の確たるものはなかなかつかめなかった。1989年に講師になり、94年に助教授になったが、長く続けた肉牛経営の企業形態の研究を２冊目の単行本にまとめた頃（1996年）にようやくにして研究の足場がしっかりした。

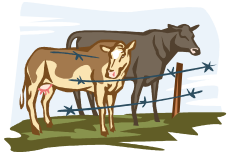
その後は、研究分野に関連する大きな社会問題の波を受け、それに対応しながら研究を進めるようになった。厳しいことではあったが、現実との緊張感のなかで新たな理論にも出会い、多くの人たちとの関係ができたのがうれしい。

その最初は、1991年の牛肉輸入自由化である。これをきっかけに、アメリカや欧州に調査を広げ比較研究をするようになった。研究の第一歩は比較にあるというが、まさしくその通りに視野が大きく広がった。また、理論枠組みのオリジナリティがだせていないことが一番苦しいことであったが、それもフードシステム論という新しい分野ができ、新しい学会が創設されたことをきっかけに進展した。新しい枠組みをもとに『牛肉のフードシステム－欧米と日本の比較分析－』（2001年）をまとめたのはしんどかったが、かなりわくわくした。

そしてこの直後にまた大きな変化が起こった。その年の秋、国内でBSE（牛海綿状脳症）が発見され国を揺るがす事態になったのはまだ記憶に新しいできごとであろう。ちょうど欧州のBSE対策をみていたことから、嵐のような食品安全行政改革の渦中に放り込まれてしまった。新しい政策や法律の立案のプロセスをそのただなかでつぶさにみることができたのは、社会科学の研究者としては得難い経験であった。その前後で世界がすっかり変わってしまったようにさえ思う。まったく新たな勉強をし、行政や事業者の方々、異分野の研究者たちと仕事をするようになった。

食品安全研究のために学際的な研究会をつくった。食品衛生、獣医衛生、公衆衛生、法学、心理学、機械工学、われわれ農業経済学の分野のものが集まっている。それはとても緊張感にみちて刺激的である。また、この春には、卒業生の方と食品企業数社から寄附をいただき、寄附講座「食と農の安全・倫理論」を開設した。二分野一講座が一緒になって同名のプロジェクト研究をはじめている。

このなかから新しいテーマがたくさんでてきた。消費者の食品選択行動やリスク認知を把握するため、無謀をかえりみず認知心理学をも取り入れているし、コミュニケーション手法の開発、食品衛生のプロフェッションの確立と職業倫理の探求などもはじめようとしている。社会的に喫緊であり、研究者にとってもおもしろい課題が山積している。



Center for Women Researchers

〒606－8303　京都市左京区吉田橋町

電話 075（753）2437
FAX 075（753）2436
Email: w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP：http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/

◆研究会◆　雇用形態の多様化と処遇格差をどう捉えるか
－正社員の画一化から正社員の多様化へ－
11月28日（水）法経本館２階第８教室
講師：久本憲夫（経済学研究科教授）　どなたでも参加できます